

GUTENTAG

発行 仙台日独協会 企画・編集 仙台日独協会文化センター

仙台市青葉区大町2-3-10 目黒ビル3F TEL・FAX 022-262-7430 http://sendai-deutschland.cocolog-nifty.com/blog/



ドイツ国会議事堂のガラスドーム

ご挨拶

文化は架け橋となるといいますが、そのためには優れたパートナーが必要で、仙台日独協会は、日本のゲート・インスティテュートにとってその大切なパートナーです。ここでは、ドイツの幅広い文化活動を感じることができ、楽しい会合や興味深い講演、研究のために、日独両国の人々が集まって肩を寄せ合います。ドイツでの生活について、実体験に基づいた情報を交換しあうことは、私たちにとても有益です。ここ数年間に、私たちが仙台日独協会のこうした文化交流をより強く後押しすることができたと思えば、光栄に思います。2011年の秋、ゲート・インスティテュート総裁、クラウス・ディーター・レーマン博士が、あの震災から7カ月後の宮城県を訪れ、日本の学者、ジャーナリスト、職人の方々30名に特別奨学金を給付したことから始まりました。この奨学金制度により、私たちは昨年には、ドイツの選りすぐりの専門家たちが日本との関係を築き、深める可能性も拓きました。2016年の奨学金は、名門東北大学の法学部教授に授与されました。ドイツ語での会話がより流暢になったことで、研究でのネットワークが強化され、生き生きとした文化交流のすばらしい模範となることでしょう。こうした皆さんの良き美りを思い起こしながら、私は2017年もみなさんと協力しあっていることを楽しみにしています！



ゲート・インスティテュート/東京ドイツ文化センター所長 ペーター・アンダース

GUTENTAG ●発行/仙台日独協会 ●連絡先/仙台市青葉区大町2-3-10 目黒ビル3F TEL・FAX 022 (262) 7430 ●印刷/株式会社 エー・エー・エー

EUの政治的・経済的現状

ドイツ連邦共和国大使館公使 シュテファン・グラープヘア博士 (Dr. Stephan Grubert)

(通訳 仙台日独協会常務理事 ウィルヘルム・菊江)



EUは第二次大戦後の1957年加盟国6カ国で始まり、現在、欧州28カ国が、多様性を持ちながら一つの体制で、欧州に平和をもたらすという目標のもとに連合体を結成しています。シェンゲン協定(26カ国)を遵守し、国境通行の自由、 Erasmus制度による大学生の学習および学業成績の共通化、連合国基本権憲章、欧州議会への直接選挙などを掲げています。欧州委員会はありますが、欧州政府という行政体は存在しません。欧州憲法が完成されていなかったり、ユーロ通貨圏は19カ国であったり、共通の経済政策が十分考えられていないという弱点があります。

しかしながら、EU域内での労働者、商品、サービス、資本の移動の自由は確保されています。さらには基本権憲章には共有の価値観も明記され、人権と基本的自由の保護、難民庇護、性的指向の差別禁止、平等な労働条件、不当解雇からの保護、生活保護や住宅扶助の権利、さらに公正な裁判など司法に関する権利も書かれています。欧州連合体は約5億人の市民の福利厚生目的にこれまで長期に亘って地道な努力がなされたのです。

ユーロの導入による通貨統合、難民、イギリスはEU離脱するか(注:この講演会はイギリスのEU離脱決定前日に行われました)などの問題を抱えているEU(欧州連合)の政治的・経済的現状、とりわけドイツの役割、さらには日本とドイツの共通の国際的役割についてお話しします。

ドイツ自身の事を言えば、現在は失業率も6.4%と低く(ユーロ圏内は11.2%)、時間賃金は8,50ユーロであり、輸出総額は1兆2000億ユーロという数字が出ています。ドイツがEU圏内の経済成長の牽引力を担っていると言えるでありましょう。

ドイツはこれまでの歴史から、民主主義と権力の分配(衆議院と参議院、幾つもの政党の存在、憲法裁判所)を学んだのです。EU圏内で一人勝ちをしようとは考えているわけではありません。ヨーロッパの中心で起こった25年前の東西ドイツの平和的結びつきによって、一つの国になれたという事実が、ドイツの精神的黒柱となっています。これまでの政治的安定により、ドイツがこのような強い経済成長を誇る国となったと言えます。

イギリスのEU残留を多くのEUの国々は望んでいるでしょう。キャメロン首相は数ヶ月前に残留した場合のイギリスの立場を我々と交渉しました。しかしイギリスがEUから離脱した場合にも、残りのEU加盟国(27カ国)は足並みをそろえて、これまでの計画を進め、イギリスとの税制問題などの通商交渉を綿密に考えていかなければなりません。



2016年のG7では国連安全保障理事会の非常任理事国としての日本の意義を確認したことです。現在650万人以上の難民を抱えるドイツを含めた欧州の国々では今後どのようにこの難民問題に対応すべきかの話し合いが行われました。その結果、まず難民となるその原因を考え、その問題を解決すべきであるという案が出ました。ドイツのシュタインマイヤー外務大臣はこの責任は大が担うべきで、日本とドイツが手を取り合っこの課題を解決できるのではないかと述べました。日本とドイツは経済大国です。両国民のためにも確実な経済成長を期待して、金融および国有財産管理政策と構造改革を進める政策について話し合っなければなりません。

ドイツではこれから10年から15年後に就業年齢層の労働人口が600万人減ると言われています。女性の就業率はすでに30%と言われ、女性が安心して働けるように保育園を増やす政策がとられています。生産性をたかめ、労働力を確保するために難民と言われる外国人労働者も必要になってきます。外国からの移住者を増やして、労働人口減少を克服しなければ経済成長は望めません。

ドイツには外国人は約800万人います(そのうちトルコ人は150万人です)。人口が約8200万人ですから、一割が外国人です。ドイツの大学では約30万人の外国人学生が学んでいます。政治的迫害から逃れるためにドイツに来る外国人(約44万人)に対して、ドイツはヴィザを発行し、ドイツ語教育を施し、ドイツのために働いてもらう政策を進めています。こうした役割は日本でも行われている事とおもいます。

ご静聴ありがとうございました。

(2016年6月24日)

本稿はネクスコ・エンジニアリング東北会議室にて行われた講演を訳したものです。

仙台日独協会文化センター NEWS

ドイツ語でドイツ人と話してみたい!と思っっている方のためのドイツ語会話やこれからの仕事に役立つドイツ語検定試験の準備の授業を行っています。



今年も第五回目となるドイツ語研修者を募集します。ドイツのゲート・インスティテュートにて一月間語学などドイツ文化を学んでいただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

仙台日独協会文化センター
http://www.doitsugo.jp
仙台市青葉区大町2-3-10 目黒ビル3F
TEL/FAX 022-262-7430 (事務時間:月~金15時~19時)

仙台日独協会この1年

仙台日独協会が実施した事業の一部をご紹介します。

仙台日独協会事務局

2016年4月16日 第32回定期総会

場所 宮城県知事公館

27年度の事業報告、収支決算報告及び28年度の実施予定事業(案)等、すべての議案について承認されました。今回は桜の美しい時期に合わせ、宮城県知事公館での開催となりました。総会の後は、現在多くの舞台で、指揮者として活躍の村上寿昭氏をお招きし、貴重な体験談を、時にユーモラスなエピソードを交えお話ししていただきました。引き続き懇親会では、お茶会となり、春のうらかな午後ひとときを過ごしました。

5月5日、5月6日 ライブツィヒ弦楽四重奏団 演奏会

場所 中新田パツハホール、
聖ドミニコ学院聖堂

2011年の震災以降、毎年開催されているライブツィヒ弦楽四重奏団の音色は、年ごとにファンを増やし、待ち望まれています。仙台では聖ドミニコ学院の聖堂で開催され、大人に混じって学院の可愛い小学生も一緒に、美しい弦楽の音に聞き入りました。



6月1日

第4回ドイツ語研修者 派遣事業募集

これまで12名の研修生を送り出してきた派遣事業も、今年で4回目となりました。1ヶ月の研修を終えたみなさんは、実社会におけるそれぞれの分野で、その成果を発揮されています。各国から集まったクラスメートとの異文化交流など、得難い貴重な経験をされています。

6月24日 ドイツ連邦共和国大使館 首席公使 シユテファン・グラープヘア 博士講演会

場所 ネクスコ・エンジニアリング
東北 会議室

「EUの経済政策」
「ドイツのEU内での立場」
イギリスのEUからの離脱が現実のものとなった、まさにその当日が講演会となりました。この度は、ネクスコ・エンジニアリング東北様のご協力を得て、会議室で開催されました。講演後の質疑応答の際には、予定時間をオーバーするほどの質問がなされ、博士から逐次丁寧なご返答をいただきました。

7月22日～7月27日 小・中学生の絵画展 「わたしのドイツ2015」

場所 東北工業大学一番町ロビー

子供達の自由な大らかな発想には、毎年驚かされます。今回のテーマは「ドイツのいま」。大人たちの当たり前の無難な解釈をよそに、想像力豊かな楽しい作品が会場の壁、いばいに展示されました。なお、ドイツ大使館では、日本全国の小・中学生を対象に、毎年「わたしのドイツ」絵画コンテス



9月17日～9月25日 仙台オクトーバーフェスト 2016

場所 仙台青葉区錦町公園

毎年、ドイツミュンヘンで開催される国民的なビール祭りである



る、オクトーバーフェスト。仙台では2006年から開催しており、これまで仙台日独協会は名義後援団体として協力してまいりました。今年はドイツから「ヴァイズングラム楽団」を迎え軽快なパフォーマンスを披露いたしました。

11月15日 ヨアヒム・ガウフ前大統領 来日

場所 ドイツ大使公邸

平成28年11月15日、ドイツ大使公邸において同大統領(当時)の歓迎レセプションが行われ、当協会からはウィルヘルム菊江常務理事が出席。大統領からは日独の交流や日本におけるキリスト教学校の教育事情のお尋ねがありお答えさせていただきました。



11月27日 ドイツのクリスマス飾り 講習会

場所 仙台日独協会文化センター

一家団欒のひとときを想像しながら、飾られていくクリスマスツリー。今年は例年のストロウタイプ他に、ロウを溶かし、枠に飾りを入れて固めたオーナメントなど、色とりどりのキャンダルを作りました。想像以上の出来栄に、みんな大満足。作品を囲んで、暖かいクリ



スマスの飲み物とお菓子をいただきながら、足早いクリスマス気分を味わいました。



1月28日 新年会

場所 仙台国際ホテル

何かと忙しい年末をさけて、新年会を開催しました。今回は第4回のドイツ語研修生として、ミュンヘンに行かれた遠藤聡太氏に、1ヶ月の研修体験談をお話していただきました。引き続き新年



会では、空くじなしのプレゼントも手に入れ、美味しいお料理とワインを片手に、久しぶりに顔を合わせた会員のみなさんのおしゃべりは、まだまだ尽きないようでした。



日独抄

日本とドイツの 信仰する心

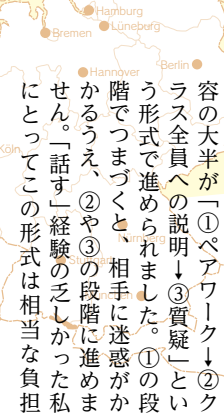
仙台日独協会 副会長
木村邦雄



日本には履歴書に信仰する宗教を記入する欄はない。宗教の政治介入は国政・地方自治においてもあまり聞かない。日常生活でも宗教による分け隔ては顕著に感じられない。今日、我々日本人が当たり前の事としてきた風習の始まりは、約400年前に延暦寺襲撃の主犯者である織田信長が積み上げた政教分離政策であることを私は知らずにきた。信長は歴史上の偉大な業績を成し遂げた偉人、「八百万の神」信仰を、日本人に推進拡大した巨人と言えるかもしれない。

出版し、ドイツ国内でベストセラーにランク入りしたこの本が、日本語版で出版され、日本でもロングセラーになった。キリスト教「二神教」であるドイツ(ヨーロッパ)に約500年前のマルティン・ルターの宗教革命が起こり、旧教と新教とに二分された。この二分化は完全には解消されていないが、その後、数々の問題が生じながらも、キリスト教は今なお人々の精神的支柱であり、文明の底流にある事がこの本を読むとよくわかる。

一方、「神棚を拝み、仏壇を拝む」。こうして神と仏と一緒に奉り、それを伝統的に1千年以上も祈り続けているという「多神教」を、ごく自然に受け入れているのが、日本人の宗教に対する姿勢であり、習慣と言える。日本の「八百万の神」の存在と私の毎朝の神と仏への祈りは、立派な信仰心と自負して、80才になる。



「みなさん、私の授業では辞書は使わないで下さい。わからない単語があれば、別のドイツ語で言い換えてあげます。そして、相手の目を見て話すことは大切です。また、私の授業でドイツ語以外の言語を話してはいけません。ただし、休憩中は好きな言語で話しても構いませんが、授業中はドイツ語です。わかりましたか？」これが、マンハイムのゲーテ・インスティテュートの初めての授業で先生から言われたことです。このように今までの常識を破ることから、私のマンハイム滞在は始まりました。

文法について、または不動産屋と客になりきって交渉をするテーマ、田舎と都会はどちらが良いかなどの課題が与えられ、12名のクラスで2人ずつ組んで、皆の前でプレゼンテーションしなければなりません。クラス全員が毎日宿題や自習に追われました。教科書を使うのは稀で、授業中にノートに書くのも禁じられることがありました。先生曰く、「単語や表現は頭の中に入れて！」。授業中は質問を必ずするように言われ、その日に習ったことで、わからないことが無いようにと指導されました。

初日はクラス分けのために文法知識と簡単な作文能力を問うテストが行われ、本格的な授業は二日目からでした。他都市のゲーテの詳しい状況は分かりませんが、ミュンヘン校の中上級クラスは午後(13時15分から17時30分まで)に配置されています。午前のクラスに配属されることを見込んで、午後には隣の図書館や司法機関などを訪問しようと考えていた私のプランは、初日の夜に早くも崩れ去りました。本研修への応募を検討されている方には、各校のスケジュールの差異・特徴を十分に調査することをお勧めします。

私のクラスは総勢10名で、クラスメートの出身地は、スイス、カナダ、ロシア、ブラジル、南アフリカ、トルコ、ベトナム、日本であり、それぞれの職業も、学生、銀行員、看護師、研究者、大学職員、主婦など実にさまざまでした。語彙力や文法の知識にはバラツキがあったものの、とりわけ欧米圏の人たちの「聞く」能力は非常に高く、授業も彼らの水準をベースに進められたため、特に最初の1週間は「先生の指示を聞き取るのもやっ」といった状況からのスタートでした。



クラスメイト

授業で特に重視されていたのが、Sprechen, sprechen und sprechen、(「話す、話す、話す」)のことです。扱うテーマは毎回さまざまでしたが、新出語彙の復習も含めて、授業内容の大半が「①ペアワーク」「②クラス全員への説明」「③質疑」という形式で進められました。①の段階でつまづくと、相手に迷惑がかかるうえ、②や③の段階に進めません。「話す」経験の乏しかった私にとつてこの形式は相当な負担

さらにはクラスの中でお互いの発表を評価し合い、感想を述べることも大切なものでした。恐らくドイツではこういった教育は当たり前に行われているのでしよう。自分の意見を持つことを求められ、かつそれを発表しなければならぬ状況は、日本でのこれまでの教育からは得られないものでした。自由に意見を述べるのが楽しく、しかもいろいろな見解を聞いて、毎晩多くのことを考えるようになりました。語学を学ぶということ、自分自身の世界が広がって行くことなどの、再度認識させられる毎日でした。

もちろん、勉強ばかりではありませんが、様々なアクティビティも用意されていたので、カーニバルの時期でしたので、その時期に食べるお菓子や顔にペイントすることを教えられました。オペラ鑑賞や隣のハイデルベルクへの市内ツアーなど、どれも無料か破格の安さで提供されました。毎日の勉強に明け暮れた、観光する時間があまり取れなかったため、こうしたドイツ文化を感じ取るイベントに私たちは大喜びしました。

でも、勉強ばかりではありませんが、様々なアクティビティも用意されていたので、カーニバルの時期でしたので、その時期に食べるお菓子や顔にペイントすることを教えられました。オペラ鑑賞や隣のハイデルベルクへの市内ツアーなど、どれも無料か破格の安さで提供されました。毎日の勉強に明け暮れた、観光する時間があまり取れなかったため、こうしたドイツ文化を感じ取るイベントに私たちは大喜びしました。

もちろん、勉強ばかりではありませんが、様々なアクティビティも用意されていたので、カーニバルの時期でしたので、その時期に食べるお菓子や顔にペイントすることを教えられました。オペラ鑑賞や隣のハイデルベルクへの市内ツアーなど、どれも無料か破格の安さで提供されました。毎日の勉強に明け暮れた、観光する時間があまり取れなかったため、こうしたドイツ文化を感じ取るイベントに私たちは大喜びしました。

もちろん、勉強ばかりではありませんが、様々なアクティビティも用意されていたので、カーニバルの時期でしたので、その時期に食べるお菓子や顔にペイントすることを教えられました。オペラ鑑賞や隣のハイデルベルクへの市内ツアーなど、どれも無料か破格の安さで提供されました。毎日の勉強に明け暮れた、観光する時間があまり取れなかったため、こうしたドイツ文化を感じ取るイベントに私たちは大喜びしました。

もちろん、勉強ばかりではありませんが、様々なアクティビティも用意されていたので、カーニバルの時期でしたので、その時期に食べるお菓子や顔にペイントすることを教えられました。オペラ鑑賞や隣のハイデルベルクへの市内ツアーなど、どれも無料か破格の安さで提供されました。毎日の勉強に明け暮れた、観光する時間があまり取れなかったため、こうしたドイツ文化を感じ取るイベントに私たちは大喜びしました。

1ヶ月間のドイツ語学研修を終えて

小野 いずみ

1ヶ月の密度の濃い、素晴らしい日々は、私のこれまでのドイツ滞在の集大成であったと感じます。多くの出会いや思い出となる貴重な機会を与えて頂いたことに深く感謝しております。この経験はいつの日か自身の人生の糧となるに違いありません。

桜田 一恵

11月下旬から語学研修に参加してきました。語学研修の終わった午後の時間に、介護施設2か所を視察しました。

1軒目の施設は、南西部のパールデン・ヴェルテンベルグ州(州都はシュトゥットガルト)にある財団経営の施設で、69歳から98歳の方が入所されていました。そのうち3分の1は介護の必要のない人で、残りが介護を必要とする老人でした。心臓病や脳疾患など様々な疾患を抱えていると共に、アルツハイマー認知症の人も多数住んでいました。その入所者の方々はケアするスタッフは、50%が有資格者、50%はアシスタントです。介護士の人手など大きな大学病院がある地区では、職員の確保が難しいようでした。老年期に特化した専門の看護師は「老人介護士(Altenpflege)」という特別な資格を持つ看護師のみが活躍しています。また、認知症の住まいには認知症に特化した看護師が働いており、認知症の入所者が穏やかに過ごせるようにケアされています。談話室にはギターが置かれ、スタッフは静かにギターを弾いたり、認知症の方々と昔、ミサで歌っていた歌を歌ったり、気持ちを落ち



ドイツ語の先生とクラスメート

着かせるためのケアがなされています。2軒目の施設は、ドイツ赤十字(DRK)が経営している施設であり、105人が入所されていました。平均年齢は男性72・6歳、女性は82・1歳です。1軒目の施設同様、3分の1は介護を必要としない人で、3分の2は介護を必要とする入所者でした。1軒目も2軒目も、どちらも街中ではあるのですが、喧騒とは無縁で静かな環境にありました。

患者や入居者が自分らしい生活、人間の尊厳を保ちながらの生活が確保できるように、日々の細かい言動や所作にまで看護師や介護士が時間をさいて気を配り、誠実にゆったりと向かい合っているその姿勢に大変感銘をうけました。

日本もドイツも在宅での生活を政府は勧めています。ドイツのように、日本でも、患者一人一人が看護師や医師、家族と時間をかけて話し合い、最善の生活の場はどこなのかを私たちが親身なって考え、その患者にあった施設を見出していかねばならないと改めて思いました。時間にゆとりのあるドイツの看護師の日常が少し羨ましくなりました。

当初の施設訪問の目的として、看護師と介護士の連携について学ばせていただきました。日本もドイツも在宅での生活を政府は勧めています。ドイツのように、日本でも、患者一人一人が看護師や医師、家族と時間をかけて話し合い、最善の生活の場はどこなのかを私たちが親身なって考え、その患者にあった施設を見出していかねばならないと改めて思いました。時間にゆとりのあるドイツの看護師の日常が少し羨ましくなりました。

遠藤 聡太

私は、仙台日独協会のご支援を受け、昨年の11月下旬から12月中旬までの約1ヶ月間、ミュンヘンにて研修の機会を得ました。

私は現在、大学教員として法学の教育と研究に携わっています。日本の法学は、特に19世紀末以降、ドイツ法学の影響を強く受けて発展してきた歴史をもち、現在でも頻りにドイツの議論を参照して、日本に紹介する傾向にあります。日本の法制度の成り立ちを知る、日本の法制度をより深く理解する、あるいは、今の日本の法制度をより良いものにするための一つの方法として、ドイツの法学や法律の状況を学び、理解することが有益だと考えられているわけです。もっとも、法学研究者の多くが普段行っているのは、ときに非常に難解なドイツ語の文献を読み、これを日本語で整理・検討するというものであり、「ドイツ語を聞く、話す、書く」機会は十分に確保でき

オーストリア自転車紀行

比田 雄仁



帰りは日没の時間を見ながら往きにゆっくりと立ち寄ることができなかった街を巡り、道端にあるワイナリーに寄りながらの輪行です。気づかぬうちに、リュックはワインやジャムの瓶でギッシリ。その量はすれ違う自転車乗りたちに驚かれるほど。それでも、少し傾いた日に照らされて往きとはまた別の表情を見せてくれる風景は、背中の荷物の重さも忘れさせてくれます。そしてこの日はオーストリアの Maibaumfest の前日。通りすがりの街々で大きなモミの木を立てようと村々の若者たちが集まる姿に、Wachau の長い歴史と伝統を感じることもできました。

19:00過ぎに Melk に戻ると、Melk 修道院は夕日に照らされ神々しく佇んでいました。朝から1日走り、歩き、お腹も空いたのでホテルのレストランで、連日の大きなシュニッツェルをいただきました。

バスや車、土日には Wachau 鉄道も走っていますが、長い歴史と雄大なドナウの自然を文字通り肌で感じながら行く自転車紀行は、この上ない感動と充実感を与えてくれた旅でした。



昨年5月、中東欧を巡る旅のなかで2泊3日でオーストリア Wachau 渓谷を訪れました。Wachau 渓谷は、ドナウ川沿いに Melk から Krems までの40kmにわたり古城や修道院が点在する景勝地で、世界遺産に登録されています。ウィーンから1時間ほど、前日に鉄道で Melk に入りました。翌朝、Krems までいよいよ自転車の旅です。

朝8:00、宿で自転車を借り、大きめのリュックを背負って出発です。Melk を発ってすぐ、とうとうと流れるドナウ川を渡る橋を越えるとドナウ川左岸を川沿いに走る自転車道路が始まります。切り立った高い山々が続く右岸に対し、自転車道路が走る左岸は緩やかな丘となっており、緑豊かな牧草地、Wachau 名産のワインや杏の畑、中世からの街が広がっています。雲ひとつない青い空、悠然と流れるドナウ川と豊かな緑、古い街や教会、ブドウ畑やあずき畑、そして山の上の古城など、文字通り絵に描いたような風景のなかを自転車は進みます。自転車旅＝輪行のいいところは青空や緑、石畳の古い街並みを間近に感じながら、進むことができることです。古い街の細い路地に分け入って教会を覗き、ブドウ畑を通る道端にたたずむマリア像を眺め、渓谷に広がる豊かな自然と歴史が織りなす風景は、筆舌に尽くしがたいほど美しく、目の前に現れる風景は、止まらずに進むことをなかなか許してくれません。途中、Durnstein で昼食をとり、昼すぎに Krems に到着しました。

Wachau 渓谷の東端に位置する Krems は、ドナウ川沿いの斜面に広がり中世の面影を色濃く残す街で、ゴシック、ルネサンス、バロックの街並み、城壁や数々の教会など多くの歴史的建造物が続きます。ローマ時代から生産されてきたといわれるワインはもとより、忘れていけないのは杏のジャムやリキュールです。教会や修道院、美術館を中心に市街をゆっくり回り、お土産を背負って後ろ髪を引かれる思いで往路、Melk に戻ります。

気持ちの良さが評価されていない日本のトイレ

ハンナ・ラーブ



「日本学を勉強して、何度も日本に行くという魅力が日本という国にはあるの?」と尋ねられることが度々ある。もちろん私は日本語やその文化などすべてのことに興味があったから、日本学を学び始めたのであるが、何よりも日本の日常の些細なことに惹かれた。その一つが日本のトイレである。

日本はトイレの楽園だ!どこにいてもトイレはいくつもあるうえ、それが必ず使えて、とても清潔である。それに比べて、ウィーンの地下鉄のトイレは、入るのに勇気がいるし、ひと目見て、使いたくなくなる。しかもそんなトイレに使用料金(約50セント)がかかるのだ。ウィーンでも大きなデパートにトイレがあるが、そもそも、デパートがあちこちにある訳でもない。そして、日本のトイレのように技術的に優れたものではないしね。日本のトイレは言ってみればちょっとしたお尻のSPA。柔らかなパシャパシャという効果音(うれしい!聞かれたかなという心配もいらない!)からお尻のシャワー、そして乾燥機能(トイレトペーパーの無駄使もない!)まで付いている。トイレでリラックスできるようにすべての工夫がなされているのが日本のトイレである。駅にはたまに「伝統的な」和式のトイレがあるが、デパートには必ず新機種のトイレがある。コンビニでは買い物をしなくてもトイレが使える。しかし、コンビニがないオーストリアは違う。日曜日となると、レストランかガソリンスタンドくらいしか営業していないから、無性に行きたい時、どこを見渡しても希望がない。自宅に帰るまで「我慢しろ!」だ。日本ならすぐ近くのコンビニに飛び込める!なんて便利な!

日本でちょっと困るのがトイレトペーパー。薄すぎる。私の経験だと言いたくもないけれど、慣れていない人は、多分、ペーパーロールの四分の一を手を取ってしまうでしょう。でも、本当はそんなに紙はいらないのですよね。だって、お尻のSPAがあるのですから。



Von japanischen Toiletten, einer unterschätzten Annehmlichkeit

Hannah Raab

Ich werde oft gefragt, was ich denn an Japan so faszinierend fände, dass ich Japanologie studieren und immer wieder dorthin fahren würde. Natürlich habe ich Interesse an der japanischen Sprache, Kultur und allem was dazu gehört, aber begeistern tun mich vor allem die kleinen Dinge im Alltag; wie zum Beispiel Toiletten.

Für mich ist Japan einfach das Toilettenparadies! Überall sind sie, und jederzeit nutzbar, umsonst und noch dazu meistens sauber. Kein Vergleich zu Wien mit seinen unzumutbaren U-Bahn-Toiletten, die will man nach einmal hinsehen wirklich nicht benutzen, und zahlen muss man dafür auch (meistens etwa 50cent). Auch in Wien gibt es in den Kaufhäusern Toiletten, aber die großen Kaufhäuser gibt es halt auch nicht überall. Und so technisch fortgeschritten, wie die japanischen Toiletten sind sie dann auch nicht. Japanische Toiletten sind ja schon kleine Hintern-spas. Von der akustischen Untermauerung mit sanftem Plätschern (Hurra! Man muss sich keine Sorgen mehr machen, gehört zu werden!) zur „Duschfunktion“ bis hin zum sanften Trockenblasen (weniger Klopapierbedarf!) haben die meisten japanischen Toiletten alles, was man sich für einen entspannten Toilettengang nur wünschen kann. In manchen Bahnstationen mag ja noch die „traditionelle“ japanische Hocktoilette vorherrschen, aber in den Kaufhäusern da gibt es sie. Und natürlich in den Konbinis, jederzeit nutzbar. Nicht so wie in Österreich, wo es keine Konbinis gibt und wo ja Sonntags außer Restaurants und Tankstellen sowieso nichts offen hat. Lustig ist es da wirklich nicht, wenn einen da die Blase drückt und weit und breit ist keine Hoffnung in Sicht. „Durchhalten!“ heißt es dann, bis in die heimischen Gefilde. In Japan, da geht man einfach schnell in den nächsten Kombini. Praktisch!

Wo es in Japan dann noch nicht so ganz gut klappt ist das Toilettenpapier. Ein bisschen zu dünn. Wer das nicht gewohnt ist, wickelt sich die ersten paar Male wahrscheinlich ein Viertel der Klopapierrolle auf die Hand (nicht dass ich hier aus Erfahrung sprechen würde). Aber brauchen würde man es ja eigentlich eh nicht, es gibt ja den Hintern-spa.

訃報



仙台日独協会前会長(駐仙台ドイツ連邦共和国前名誉領事)大和田泰夫様は平成28年2月6日享年84歳でご逝去されました。ここに謹んで故人に対する生前の当協会へのなみなみならぬご貢献に感謝申し上げますと共に、ご冥福をお祈り申し上げます。



ゲーテ・インスティテュート東京前所長ライムント・ヴェルデマン様は平成28年11月25日享年52歳でご逝去されました。同氏は東日本大震災復興支援の一環として被災地の伝統工芸および再生可能エネルギーの専門家のドイツ派遣事業を実現させて下さいました。心より哀悼の誠を捧げ御礼申し上げます。

指揮者への道

村上 寿昭



私がドイツでの生活を始めたのは1997年。そして2015年4月、活動拠点を日本に置くことを決心し18年ぶりに本帰国をしました。今年42歳になりますが、実に人生の半分ほどをドイツ語圏で過ごしたことになります。私にとってドイツは、第2の故郷です。

《音楽人生のスタート、指揮者との出会い》

私の音楽人生は、幼児期の習い事としてのピアノのレッスンからスタートしました。そして中学2年生のとき、マーラーの「千人の交響曲」に子供の合唱として参加したのですが、そこで出会った高関健、シノーポリという二人の指揮者を見て、「指揮者とはなんてカッコいい仕事なんだ。自分も指揮者になりたい!」と思ったのです。高関さんは今も尊敬する先輩です。シノーポリはオペラを上演中指揮台の上で亡くなったという偉大な指揮者です。彼らを見て、指揮者というのはオーケストラ、歌手、合唱といった大勢の人を、まるで巨大な楽器のように操る職業なんだと思いました。そこで指揮の高階先生に師事しました。

指揮者になるのなら、音楽以外の一般的な知識も広く学ばべきだという先生の教えに従い、高校は普通高校に通い、大学は迷わず桐朋学園大学指揮科に入学しました。桐朋の指揮科は毎年入学者をとっておらず、私が10年ぶりの入学者でした。私の後輩は、8年後に入学しています。大学卒業後はドイツ・ベルリンに留学、その後ウィーンに留学します。

《師匠との出会い》

桐朋と言えば、当時小澤征爾先生が教授職についておられました。とは言っても、先生は学校には滅多にいらっしゃいません。そこで、松本で毎年夏に開催されているサイトウキネンフェスティバル(現セイジオザワ松本フェスティバル)のオケメンバーだった指導教官に「小澤先生の練習を見学させてほしい」と頼み込んだところ、サイトウキネンでのバイトの仕事を紹介してもらえました。ライブラリアンという仕事で、オケの楽譜を用意したり、譜面台をセットしたりする仕事です。その仕事の合間に小澤先生に指導を請うことが出来ました。初めてお会いしたとき、自分はガチガチに緊張していて、先生の冗談に笑えなかったのを覚えています。

その数年後のウィーン留学時代には、ちょうど小澤先生がウィーン国立歌劇場の音楽監督をされていて、私はアシスタントとして間近で小澤先生の仕事をみる事が出来ました。幸運な下積み時代です。

《リンツ、ハノーファーでの活動》

2004年、リンツ州立歌劇場、そして2006年からドイツハノーファーの州立歌劇場に転じて指揮者として活動しました。ヨーロッパの歌劇場は連日オペラやバレエの演目が上演されており、所属の指揮者がそれを分担します。数多くの本番公演の指揮をする環境というのは、日本では得られないものでした。また、ベルリン、ウィーンの留学時代から通じて言えるのですが、オペラが生まれた本場の空気、街、人、文化を肌で感じることは私の音楽への解釈をより深めるものとなりました。

《帰国後とこれから》

帰国して最初のオペラの仕事は、昨年2月の小澤征爾音楽塾オペラ「こうもり」での小澤先生との振分けでした。かつてアシスタントして先生の一手一投足を見逃すまいとかじりつくようにしていた自分が、先生と同じ指揮台に立つということは、一言では言い表せない感慨があります。数年ぶりに先生の前で、修行を経た自分の成長を見せてやろうという気概で臨みましたが、実際は師匠ははるかに偉大で、数年を経て尚、師匠からは学ぶことばかりでした。師匠は、一生師匠なのだと思い知りました。この3月に小澤征爾音楽塾オペラ「カルメン」で再び振分けです。師匠には去年より成長した自分を見せたいと思います。

年末には友人の弟さんの心臓移植費用のためのチャリティコンサートを音楽家有志として企画し、オペラガラコンサートを開催しました。オペラ歌手6名と、朝岡聡さんという名司会者、そして私はピアノ伴奏を担当。チャリティと言うことで、普段オペラやクラシックコンサートに馴染みの少ないお客様も多かったのですが、そのときの反応がとてもよかったです。衝撃を受けた、オペラに興味を持った、素晴らしいという賛辞をいただき、こちらもとてもうれしく思いました。と同時に、このような音楽ファンの垣根を広げる活動も我々音楽家の役割の一つであらうと再認識しました。

日本での音楽活動はまだ始まったばかりですが、今後、オペラ、コンサートを問わず公演の数は増えて行くと思います。仙台の皆さんにも私の音楽をお届けできる日が遠くない将来にあると思っています。その日がくるのがとても楽しみです。

音楽家と言う職業は、終わりが無い修行の人生です。より深く音楽を探究し、優れた作曲家の作品を仲間の音楽家とともに奏で、聴いていただくお客様にお届けする。私の音楽が、聴く人を少しでも幸せな気持ちにできるように、一日一日を全力で走りたいと思います。

